

〈夏期例会報告〉

大岡村の植物観察会

小澤正幸（入間郡名栗村下名栗 243）

第 159 回例会は、平成 11 年 7 月 25 日に更級郡大岡村で行われた。参加者は林一六会長、佐藤利幸、上野勝典、上野由貴枝、小山泰弘、篠原喜運、岡田裕美子、藤原好、水野千代、松沢清見、井出靖、霜田芳武、尾台善貞、小口好久、三井幸子、相馬敬子、丸山千恵子、大平仁一、大平ユリ、青木邦夫、宮島吉彦、山本絢子、中山博子、藤倉佑子、渋谷美佐緒、川上美保子（幹事）の各氏と小澤正幸の 27 名、そして信州大学の学生 23 名の合計 50 名であった。

始めに大岡村文化センターをお借りして、大岡村公民館長の池内朝雄先生に大岡村の概要についてお話しいただいた。次に小澤より大岡村誌のための植物調査の状況や大岡村の植物相の特徴などを説明し、観察会に移った。

最初の観察地である芦沼池は、大岡村北東側の標高約 850m に位置し、ヨシやフトイ、ガマ、オニナルコスゲ、カサスゲ、ヤチアザミが生育するなど、湿生植物の生育環境として良好な水際部が残った池である。平成 10 年度の大岡村誌植物調査では、ミツガシワの生育も確認された。現地では、ミツガシワやフトイ、ヤチアザミ、サクラタデ（花が小さく、ヒメサクラタデか？）などを観察した。芦沼池周辺に生えるミソハギ属植物は、抱茎した葉身や萼の付属体の形質からエゾミソハギと思えたが、茎にごくわずかに突起毛があるのみで、葉裏や萼筒などは無毛であった。エゾミソハギの突起毛の量には、かなりの変異があるが、このようにほぼ無毛のエゾミソハギがほかでもみられるか調べる必要がある。芦沼池周辺のエゾミソハギは、すべて無毛に近い個体であった。

次に樋知大神社に移動した。神社裏側の斜面一帯には、約 1 ヘクタールのブナ林がある。

このブナ林には、オオバクロモジやオオカニコウモリといったおもに日本海側に分布する植物と、ウラジロモミのようにおもに太平洋側に分布する植物の両方がみられる（本誌第 31 号の川上美保子氏の報告に詳しい）。また、神社境内の湿性林では、長野県新産のミドリヒメザゼンソウもみついている。現地では、わずかに枯れ残ったミドリヒメザゼンソウの花が観察できたほか、ケヤマウツボなどの珍しい植物も確認された。近くのオートキャンプ場では、吹き付けられたコヌカグサ草のなかにエゾヌカボが生えていた。エゾヌカボは長野県に自生する植物でもあり、この個体が自生なのか、コヌカグサに混じってきた外来の個体なのか判断できなかった。こうした問題は、他の植物でも起こっている可能性が高いことが話題になった。

次に最後の観察地である聖山に移動した。聖山の麻績村側と大岡村側では、山の地形や水分条件、生えている植物がかなり違うこと、長野県ではあまり意識されていないサッポロスゲが生育することなどを説明した。山頂部は草地になっており、子房が無毛のカワラマツバやホタルサイコなどがみられた。長野県では子房が有毛のチョウセンカワラマツバが普通であること、ウスイロカワラマツバやウスキカワラマツバは、どの程度黄色いものなのか難しいことなどが話題に上った。天候が急変しそうになり、最初に集合した大岡村役場前に戻って、そこで解散となった。

今回は宿泊の予約等がなかったため、事前に参加人数を把握することができなかった。当日は参加者の車に相乗りして移動したが、参加者が多い場合には、マイクロバスの使用や車での移動のないような観察コースの設定が必要だと感じた。

最後になりましたが、池内朝雄先生をはじめ、多くの大岡村関係者の方々、そして事前および当日の準備等をすべて担当された幹事の川上美保子氏に感謝いたします。